

原子力災害の被災地で生きる看護職者のライフヒストリー

Life History of Nurses Affected by the Nuclear Disaster

荒井 千瑛

Arai, Chiaki

I. 序論

2011年に発生した東日本大震災は、各地に大きな被害をもたらした。福島県は、地震や津波被害だけでなく、福島第一原子力発電所事故に伴う放射線汚染により、避難区域が設定されるなど、複数の災厄に襲われた。これは単なる自然災害ではなく、原子力災害である。被災者は、看護職者を含め、災害により身体的、精神的、社会的に影響を受けることが明らかにされている。さらに、災害は、看護職者の離転職意識に大きな影響を与え、原子力災害の被災地の看護職者数は減少している。そのような状況であるにも関わらず、原子力災害の被災地で看護職を続けるということは、被災した看護職者にとって何らかの意味があると推測される。これまでに、被災した看護職者を対象とした横断的な研究は数多くなされているが、原子力災害で被災した看護職者が、被災地でどのように生きてきたかという縦断的視点からは明らかにされていない。災害は人の人生にどのような影響を及ぼすのか、それらは人生という時間の流れの中からでしか明らかにできないものであると考える。被災者である看護職者が、被災地で看護職を続け、生きていくことは、やがてその地域の復興につながると考える。切れ目のない支援を検討するためにも、原子力災害で被災した看護職者がどのように生きてきたのかを、長いライフスパンの中で、その人の人生に着目して明らかにする必要があると考えた。

II. 目的

原子力災害で被災した看護職者が、原子力災害の被災地で、看護職者としてどのように生きてきたのかを明らかにする。これにより、一人ひとりの人生に着目し、人々が災害後もその地域で、看護職者として生きていくことを支えるための提言を行う。

Ⅲ. 方法

ライフヒストリー法を参考にした質的記述的研究デザインである。研究協力者は、東日本大震災の発災時に、原子力災害の被災地である福島県内の中で、避難を余儀なくされた地域を含む福島県被災 12 市町村で生活し、看護職としてその地で働き、災害後も原子力災害の被災地で看護職を続けている者である。データ収集は、半構造化インタビューを実施した。データ分析は、研究協力者ごとに分析した。まず、インタビューで得られたデータから、逐語録を作成し、全体の内容を理解した。次に、時系列及びライフイベントごとに分類、整理し、東日本大震災の社会情勢資料も参考にしながら、過去から現在の時間の流れに沿って、研究協力者個人のライフヒストリーを構成した。最後に、研究協力者の人生を踏まえ、災害後、看護職者としてどのように生きてきたのかを示すテーマをつけた。研究協力者の人生の中での災害の意味や、看護職者であることの関連性について、構成したライフヒストリーと作成したテーマを見比べ、循環しながら解釈し、研究協力者が看護職者として原子力災害後を生きてきた様相を記述した。本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認（2021-021）を得て実施した。

Ⅳ. 結果

データ収集期間は、東日本大震災から 10 年が経過した 2021 年 9 月から 2022 年 3 月末までであった。研究協力者は、男性 2 名、女性 2 名の計 4 名であった。職種は、看護師が 3 名、保健師が 1 名であった。インタビューは、各研究協力者につき 4 回ずつ実施した。

A さんからは、「経験を重ねて 10 年を経て、達観した人生観を持つ」、「東日本大震災と福島第一原子力発電所事故という大規模災害の経験と、こころのケアの必要性を社会に示す」、「“人を見る”視点を看護師としての仕事に活かす」、「偶然を必然に変え、看護師の既存の枠にとらわれない新たな道を自ら創り出す」の 4 つのテーマを得た。A さんは、災害を契機に、地域で働く機会を得て、看護師の既存の枠にとらわれない働き方を創り出し、自己実現に繋がった。地元に残り、自らの求める働き方を創り出すことで、A さんらしく働くことができるようになった。これまでに、自衛官や看護師など、職場を転々としていた A さんは、原子力災害の被災地に腰を据えて生きることで、何事にも動じない心を持ち、人生を達観できるまでになった。A さんにとっての災害は、これまでの看護師としての仕事の仕方を変えてくれた契機のひとつであり、人間的に成長し、看護師として自分の思うように働ける場を、その地で創り上げることができた転機であった。

B さんからは、「まだ終わらない震災の中で、生まれ育ったまちで生きる」、「地域に根ざした日々を紡ぎ続け、次の世代に繋げる」、「自分の生き方そのものである保健師としての役割を果たす」の 3 つのテーマを得た。今回の災害は、B さんにとって、自分の意図しない外的要因で将来の方向性を変えさせられた出来事であった。しかし、生まれ育ったこのまちで生きることを、災害によって B さん自身が自覚し始め、新しいまちや人間関係を育てる契機となった。災害前は、町の保健師として活動し、地域づくりを仕事としてきたが、今回の災害によって、仕事としてではなく、ライフワークとなり、生き方そのものとなった。B さんにとっての災害は、地域や自身の生まれ育ったまちを捉え直す契機となった。そして、自身が地域住民のひとりであると同時に、保健師として、このまちに溶け込み、人との繋がりの中で生き、日常生活を積み重ねていた。

C さんからは、「怒涛の毎日であつという間の 10 年を生きた」、「東日本大震災と福島第一原子力発電所事故を契機に己の生き方を見定める」、「地域を守るために、F 病院で天職である看護師としての自分の生き方を貫き続ける」、「東日本大震災と福島第一原子力発電所事故により一時は脅かされてしまった生存権と幸福追求権が再び脅かされないよう、地域医療を支える」の 4 つのテーマを得た。C さんは、幼少期から、自分がどう生きるかを自分で決めてきた。災害後も、まだまだやれることがあると、今後の生き方を再検討し、これまでと同様に、自らの意思で生き方を決断していた。また、看護師であることは、C さんにとって生き方そのものであり、災害後に看護師が天職であることを自覚していた。原子力災害によって、C さんが幼い頃から大切にしていた日本国憲法の第 13 条の幸福追求権と、第 25 条の生存権が脅かされる状況となったことは、許せないことであった。C さんは、憲法で保障された権利を守り支えたいと考え、地域医療を支えるために、看護職員の育成、確保のシステムを構築した。C さんにとって看護師であり続けることは、自分のためだけではなく、自分の役割を果たし、地域を守り続けるための生き方そのものであった。C さんにとっての災害は、看護師が天職であると自覚し、どう生きるかを考えさせられる契機であった。

D さんからは、「東日本大震災を悲嘆せず前向きに捉え、看護師としての職責を果たす」、「学習の喜びを感じながら、常に学びに食欲であり続ける」、「困っている人に手を差し伸べることができる看護師であり続ける」の 3 つのテーマを得た。D さんは、東日本大震災を「強制リセット」と表現するように、災害によって生活や仕事の変えざるを得ない状況となった。しかし、D さんは、災害による環境の変化に順応し、どんな場所であっ

ても看護師としての職責を果たしていた。生活や仕事の間が変わり、環境が変わっても、それらをプラスに考え、その時々のお会いや縁を大切に、人生の糧にしていた。Dさんにとっての災害は、「強制リセット」であった。しかし、Dさんは、災害がもたらした意図しない様々な出来事や変化に抗うことなく順応し、新しい環境や人間関係の中で学び続け、看護師であり続けていた。

V. 考察

4名の研究協力者にとって、原子力災害は人生の危機のひとつであったと同時に、その危機を乗り越え、その後の人生において、人としても看護職としても、大きな成長を促すものとなり、人間的な強さを獲得していく契機となった。災害によって生活の全てが一変しても、生き方や働き方を見つめ直すことで、大切にしているものや心の拠り所となるものを改めて自覚し、災害後の自分の人生を決め、自身の持つ看護職者としての能力を最大限に発揮し、自己実現に結びつけていた。

原子力災害の被災地で生きることそのものが、地域の再生や復興につながるものであると言える。ひとたび災害が起こると、復興政策としての公共事業、ハード面の整備、雇用の促進などが打ち出される。しかし、人の暮らしは、仕事や収入があれば暮らしが成り立つ、というような政策では不十分である。社会を構成する最小単位の「個人」が、被災地で生きていくことが、復興への歩みとなり、その地域で無意識のうちに、自分の心と身体に染みついた生活や生き方を続けていくことが、未来につながると考える。

被災者が、災害後も地域に根付き、生きることを支えるためには、その地域の多様な人々が住民であることを自覚し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながり、住民一人ひとりの暮らしと生きがいや地域をともに創っていく社会である、地域共生社会の視点が重要である。社会全体だけではなく、その地域で生きる「個」に着目して、人が生きることを支える視点が重要である。また、災害を経て、より強固なものとなった価値観や、被災者が新たに獲得した価値観を捉え、支援者が持続的に支えることが必要であると考えます。

「個」と「生活」に着目することは、看護の本質でもあり、災害看護学においても重要な視点である。災害サイクルに応じた様々な支援システムを確立するだけではなく、看護の本質である「個」と、それぞれの日常をあらわす「生活」に着目して、被災者の生活や生きることを支えることが、災害看護学に必要な視点であると考えます。